
作品、展示空間、観者の意識化：ダニエル・ビュレンの《分裂小屋》シリーズについて

中村泰士（成城大学）

ダニエル・ビュレンの《分裂小屋》シリーズ *Cabanes éclatées* は、原型を持った作品として、それまでの彼のストライプによるサイト・スペシフィックな作品に代わって、1980年代から登場してくる立方体構造を基本とした建築的オブジェのシリーズである。その先行研究については、アレクサンダー・アルベッコが建築の脱構築と関係づけながら美術館制度の批判を強調して論じ、リオタールが視覚に関する現象学的論点から考察を加えている。前者では建築的あるいは制度的空間の問題が、後者では視覚の問題が中心的に取り上げられていると言えるが、作品の構造分析の観点から、《分裂小屋》の作品性を論じた取り組みはいまだ不十分であると考えられる。本発表では作品と観者と空間との構造的関係において、この作品がどのような働きを及ぼしているかについて考察するものである。

美術館の展示室に配置される《分裂小屋》は、その立方体構造によって、置かれた展示室と類似的つながりを示すとともに、小屋内部を囲うストライプ布から引き裂かれた、もう一方のストライプ断片が展示室壁面にコラージュされることで、展示室との間に隣接的つながりも喚起している。展示室と一体化したこの作品は、作品の中の作品、展示室の中の展示室、場所の中の場所であるとも言えるので、そのような有り様に入れ子構造の特徴を見出すことができる。その入れ子構造を分析すると、第一に、重層化する表象作用は、行き交う観者たちを表象対象として取り込むのである。すなわち、アルベルティが「開かれた窓」に絵画を見たように、ビュレンも《分裂小屋》の割り抜きに絵画のフレームと同様の作用を意識しており、割り抜きから見られる他者（観者）は絵画の対象とされうる。第二に、作品の外側面を構成する木材グリッドは、ストライプ布（絵画）を支える支持体の裏面を示し、その裏返しの構造には絵画作品に対する批判的意識の現れを見てとることができる。第三に、木材グリッドによる構成要素の露呈はさらに、展示室の建築的基本構造を暴いているとも見てとれ、ホワイト・キューブとしての同一性にゆらぎをもたらしている。その原初的な骨組みへの還元には、アルベッコも指摘しているような、必ずしもニュートラルではない展示空間の機能に対する一定の批判が存在していると解釈することができるだろう。第四に、《分裂小屋》は、展示する場所に対立するどこでもない場所として、観者の遊びを誘い込む新たな展開を引き受けている。開口部によって小屋の内外を行き来でき、割り抜きによって視覚の遊びを誘引する構造は、一種の遊戯装置として観者に自由な動きを許し、複数の視点から作品と他者を見ることを可能にしている。

純粋な色彩と構造によって原初的な空間を持ち込む《分裂小屋》は、観者を組み込み、想像世界へ誘い込みながら、同時に、観者、作品、展示空間の状況を問いかけるのである。